

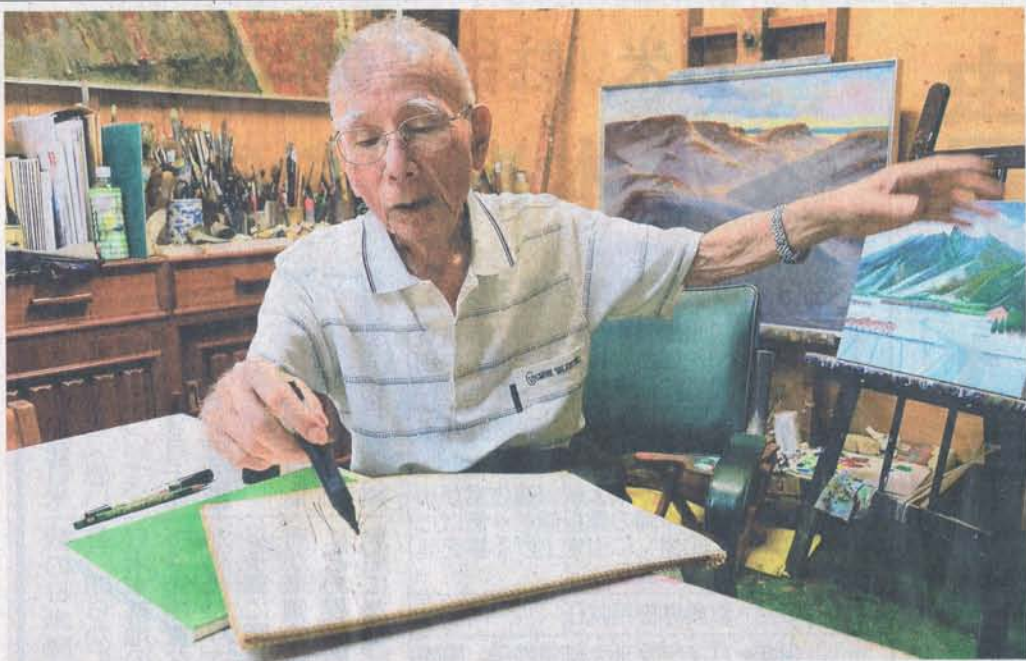


発行所  
熊本日新聞社  
〒860-8506  
熊本市中央区世安町17  
☎代表(096)361-311  
© 熊本日新聞社 2021年

# 色紙に描き残した惨状

## 加害と被害 松橋空襲の断面

2021.8.12



よく晴れた日だった。1945年7月27日、当時12歳の分部三友さん(88)＝宇城市松橋町＝は、松橋駅現同市不知火町)そばの自宅から通っていた不知火小へ歩いて向かった。学校近くの池の土手に繁茂している植物「ラミー」を刈り取り、先生に提出する勤労奉仕のためだ。

「ウー」。午前9時ごろ、学校に着いた途端、警戒警報が鳴り響いた。敵機が襲来するかもしれない。教師は子どもたちに即刻帰宅を促した。分部さんが自宅に着くと、屋内からつけっぱなしのラジオが聞こえた。「西部軍管区情報、ただ今敵機十数機、八代付近を北上中なり」。そ

↑松橋空襲についてイラストを描きながら説明する夏目信弘さん(77)月9日、宇城市

### 駅舎に爆撃 並んだ遺体

## 攻撃目標は交通インフラ

の瞬間、空気がつんざくような破裂音が分部さんを襲った。小1時間ほど自宅の防空壕に逃れ、音のした松橋駅へ向かった。様子が知りたかったからだ。すると、

自転車をこいで向かってくる男性が恐ろしい形相で叫んだ。「子どもは見んな。飯のいけんごつなるぞ」。洋画家の夏目信弘さん(90)＝宇城市松橋町＝は戦



夏目信弘さんが色紙に描いた空襲による松橋駅の被害

後、この空襲直後の駅の様子を色紙に描き残している。駅舎の窓ガラスは飛散し、壁には赤黒い血がべったり。その時、夏目さんは待合室の天井に張りついた桜色をした塊を見つけた。人間の肉片だった。近くの寺に並ぶ多くの遺体も描き残した。

日本側の記録や証言によると、駅や橋が米軍の攻撃目標とされた。「沖繩が陥落し、本土決戦が現実味を帯びてきたころ。交通インフラを攻撃し、九州に上陸する米軍の『オリンピック作戦』の前哨戦だった」。くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク代表の高谷和生さん(66)＝玉名市＝は指摘する。

一方、圧倒的な軍事力で日本を制圧しつつあった米軍にも「不運」が訪れる。8月7日の松橋空襲に参加した米軍の爆撃機1機が、現在の八代市鏡町付近に落ちた。搭乗員5人は全員生存していたが、捕らえられた後に旧日本軍により処刑されることになる。

くまもと戦争76年

(飛松佐和子)



# 血まみれの米兵「怖い」

「墜落もしくは不時着したのは、あの辺りではないでしょうか」

八代市の鏡川河口近くで顔を見合わせた。

1945年8月7日、現在の宇城市松橋町付近を狙った松橋空襲に出撃した米軍機B25「エアパッチ」。

パイロットのほか機関士や通信士ら米兵5人が搭乗していたこの爆撃機は、何らかの原因で落ちた。

米軍が付近の住民などに聞き取りをした情報を基に、古賀さんは松橋駅から南西に直線で約10キロの八代市鏡町の鏡川河口付近を墜落(不時着地と推定した。機体が回収されたかどうかは今も分かっていない。古賀さんが入手した資料には、松橋空襲作戦に参加していた米兵アルバート・グレート中尉の証言要旨が含まれている。



米軍機が墜落したとみられる付近を調査する高谷和生さん(左)と古賀昭三さん=7月11日、八代市

## 爆撃機 原因不明の墜落

### 加害と被害

松橋空襲の断面

2021.8.13

古賀昭代さん(85)は、そんな声を聞いて駆け出した。当時9歳。2歳下の妹の手を握り自宅の門の前に立っていると、縄で縛られた米兵が歩いて来た。2、3人だったですかね。顔は血まみれだった。



連行される米兵の様子について話す古賀昭代さん

「米軍機が墜落したらしい」。八代市鏡町の自宅にいた古賀昭代さん(85)は、そんな声を聞いて駆け出した。当時9歳。2歳下の妹の手を握り自宅の門の前に立っていると、縄で縛られた米兵が歩いて来た。2、3人だったですかね。顔は血まみれだった。

古賀さんによると、米兵は熊本市の熊本地区憲兵隊本部を経て福岡市の旧日本陸軍西部軍司令部へ連行された。(飛松佐和子)

と後 76年 戦



# 勝てば「英雄」なのか

7月上旬、連合国軍の捕虜問題について調査・研究しているPOW研究会の古牧昭三さん(73)＝福岡市＝は、くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク代表の高谷和生さん(66)＝玉名市＝と福岡市の郊外にある油山(標高597㍎)に向かった。

1945年8月7日の松橋空襲の際に落ちた米軍機B25「エアパッチ」。生き



自ら処刑した米兵のために冬至堅太郎さんが祭った4体の仏像＝7月3日、福岡市

## 無差別爆撃の罪

残った全搭乗員5人は福岡市の旧日本陸軍西部軍司令部に連行され、さらに油山へと運ばれた。5人は西部軍により、日本人に対する無差別爆撃の罪として軍力で斬首。憲兵の証言などから、処刑されたのは8月15日の可能性が高い。

西部軍はこの5人のほかにも、九州各地に墜落し、生存した米軍機の搭乗員を処刑したことが分かっている。45年6月19日の福岡大空襲で母親を亡くした元陸軍主計大尉の冬至堅太郎さんは、大空襲の翌日、西部軍司令部の処刑現場にたまたま遭遇し、処刑執行役を志願。1人を斬首し、上官からの命令でさらに3人を



戦争の「加害と被害」や矛盾について語る冬至克也さん

## 加害と被害

松橋空襲の断面

2021.8.14

切り殺した。

戦後、BC級戦犯として連合国軍による横浜裁判で絞首刑の判決を受けた堅太郎さんは、米軍民間情報部福岡支部から「自分のしたことをどう思うか」と尋問され、こう答えている。「法律的にはともかく、神の目から見たら死刑だと思う」(著書ある『BC級戦犯』の手記)山折哲雄編、中央公論新社)

堅太郎さんは減刑されて、56年に巣鴨プリズン(東京)から出所すると、4体の仏像を福岡市の自宅の庭に祭った。自ら手にかけた4人の米兵の霊を慰めるためだった。

「父には処刑に加担したことへの憂いはなかったと思つ」。堅太郎さんの三男克也さん(67)＝福岡市＝は

淡々と語る。「戦争は勝つたら英雄、負けたら個人が責任を取らされる。ならば空襲や原爆はどうなのか。その罪はだれが背負うのか」。多くの矛盾を抱える戦争を避けるには、「知性と理性が必要だと訴える。

克也さんは、堅太郎さんが83年に68歳で死去後、堅太郎さんと縁があった油山観音正覚寺(同市)に仏像4体を寄進した。鎮魂の思いが込められた仏たちは、「エアパッチ」の搭乗員が処刑された場所のそばで、今も静かに手を合わせている。(飛松佐和子)

くまもと戦後76年